

小樽協会 PFMを導入

入院・退院支援充実へ



PFMの導入に合わせて、地域連携室を改修・整備した

小樽市の小樽協会病院（吉田秀明理事長、柿木滋夫院長・240床）は、患者情報を入院前に把握し、問題解決へ早期に着手するPFM（Patient Flow Management）を導入。入院・退院支援による患者の不安軽減と、入院に関する業務効率化に努めている。

導入に向けて2016年に実施した患者動態調査の結果、予定入院・当日入院ともに40%台、緊急入院も15～22%と高く、入院業務の効率化と、在院日数が長期化する患者への退院支援の必要性が浮き彫りになった。

これを踏まえて、連携室患者支援センター内にPFMの組織を置き、事業計画を立案。連携室の入退院業務を標準化し、連携室、外来、病棟の業務工程を再編した。PFM専従看護師を2人、P

FMクラーク3人配置し、患者支援センター看護師を対象に患者情報収集、スクリーニングなどの実地研修やグループ研修を行うなど、入念に準備を進めた。

17年6月から、業務を段階的に試行し、入院期間2週間以上の患者を対象に退院支援計画書を作成。支援が必要となった段階で早期に介入し、退院支援加算1の対象を拡大した。10月からは第3段階として指示書の定型化やオーダーリング機能の追加などで医師、看護師の業務効率化を図っている。

入院オリエンテーションやPFM看護師による患者情報収集と各種リスクアセスメント、必要に応じたMSWの介入のほか、MSWと退院調整看護師による早期からの退院支援も行っている。

PFM導入に携わった福島洋子地域連携室室長補佐は、「多様な患者の状況に適切に対応し、地域連携を図りながら安心して入院できる環境づくりに取り組んでいく」と